ワイン用ブドウ品種の干ばつへの反応は似ているとの研究

ワシントン州立大学の研究は、灌漑の判断に品種名より土壌条件や樹冠の大きさが重要となる可能性を示す

2026年11月14日（土）



ワシントン州立大学の研究で、ワイン用ブドウ品種の干ばつへの反応は、栽培者が考えているほど大きく異ならない可能性が示された。水資源が限られるなか、ブドウ畑での灌漑管理に影響を与える結果となり得る。

研究では、ブドウ畑で30品種を2年間追跡し、水を減らした際のブドウ樹の生理的反応を測定した。研究によると、各品種の干ばつ条件への反応はおおむね似ており、干ばつ耐性を品種ごとに明確に順位付けできるような違いは見られなかった。

この結果は、灌漑計画を立てる際、ある品種はほかの品種より干ばつに強いとみなすことが多い、

ブドウ栽培における一般的な考え方に疑問を投げかける。研究はその代わりに、水分ストレス下でのブドウ樹の生育を左右する要因として、土壌条件や葉面積、すなわち樹冠の大きさが重要であることを示している。

この傾向がさらに多くの場所や季節でも確認されれば、単純な品種別の想定から、個々のブドウ畑に応じた管理へと重点が移る可能性がある。栽培者にとっては、ブドウ品種の名前だけでなく、地域の土壌特性やブドウ樹の生育状況、圃場での直接測定に基づいて灌漑を判断する必要性が高まることになる。

水の使用量を減らすよう求められるなか、ワイン生産者はブドウの収量と果実品質の安定を確保しなければならないため、この研究は飲料業界にとっても実務上の意義がある。より精密な灌漑戦略により、圃場でのブドウ樹の実際の反応を十分に反映していない可能性のある従来の干ばつ耐性区分に頼らずに、節水できる可能性がある。ひいては、乾燥地域のワイナリーの生産コストや長期計画にも影響し得る。

この研究は、すべてのブドウ品種があらゆる点で同じだと示しているわけではない。報告された結果が示すのは、このブドウ畑での2年間の観察期間において、干ばつに対する生理的反応が十分に似ており、品種を大まかに分類することに疑問が生じるということだ。そのため、議論では圃場そのものとブドウ畑の管理方法がより重要な位置を占める。

気温上昇や降雨の変動幅拡大が農業に影響するなか、ブドウ生産の研究者は、水分ストレスにブドウ樹がどう対処するかに注目するようになっている。土壌や樹冠の大きさを重視する今回の知見は、栽培者が灌漑を調整するための、より直接的な手段につながる可能性がある。土壌の種類は根が利用できる水の量を左右し、葉面積は蒸散による水の使用量に影響する。

ブドウ畑の管理者にとって実務上の要点は、干ばつへの反応が、列に植えられた品種だけでなく、ブドウ樹を取り巻く条件にも同程度に左右される可能性があるということだ。品種によって一方が常に他方より少ない水で済むという大まかな想定ではなく、区画ごとの土壌の違いや樹冠管理に基づく、より的を絞った灌漑計画につながり得る。

農業の効率向上が求められるなか、この研究はワイン用ブドウ生産における水管理を改善しようとする取り組みに加わるものだ。ワイン市場にブドウを供給する栽培者にとって、この研究は、長年の品種別干ばつ耐性の考え方に主に頼るよりも、個々のブドウ畑の土壌やブドウ樹の生育パターンを詳しく把握することが、より大きな節水につながる可能性を示している。